

アフリカでの統合型海外学術研究

プロジェクト開発研究領域 門平睦代

私は、2003年度から継続して、アフリカ4ヶ国（ザンビア、タンザニア、マラウイ、ケニア）を対象とする2つの海外学術研究に関わっている。

ひとつは「南部アフリカ3ヶ国における小規模農家レベルでの畜産振興を妨げる要因の研究」（代表者：門平）で、研究目的は、ザンビア、タンザニア、マラウイの3ヶ国の小規模農家を対象として、畜産振興を妨げている要因を、農民・NGO・政府・研究者などの視点から総合的に把握・分析し、実現可能な対策を提示することである。名大からは複数分野（獣医畜産学・文化人類学・開発学）の専門家が、また、海外の協力研究者として、ザンビア大学獣医学部・農学部、ソコネ農業大学獣医学部・農学部（タンザニア）、マラウイ大学農学部の教員が参加している。今年度の調査は、7月31日～8月23日に実施された。この研究を通じて、アフリカの大学教員が現場のニーズをよく理解し、教育内容の改善に務め、適切な（専門）情報を政府関係者や学生に伝えられるようになれば、自助努力による貧

困緩和対策の実践につながるものと、期待している。

もうひとつの研究は、「ケニアにおける土壌浸食の実態解明とその防止策」（代表者：名大大学院環境学研究所・星野教授）である。ケニア国内のビクトリア湖周辺で発生している大規模なガリー侵食地・キスム地域を対象として、地質学・地理学・生態学・農学の各専門分野から侵食の実態を解明し、総合的な見地に立つ実効的な防止策の提言が目的である。私は、農学班として、今年8月23日～9月10日の期間、ナイロビ大学の教員たちと協力しあいながら調査に参加し、ガリー形成に土地利用と農業活動がどのように影響するかを調べた。



住居近くまで迫るガリー



ナイジェリア大使がセンター来訪

去る9月15日、アリユ・ナイジェリア大使（写真右から3人目）とエヒオブチエ公使（左から2人目）が農国センターを訪問されました。効果的な植林方法を導入して砂漠化の進展を抑制し、高収量品種の穀物を導入するなどして農業生産性を高める課題など、同国が抱えている様々な農業問題を、日本の大学等の研究機関や研究者と共同して取り組んでいける可能性等につき、センタースタッフと1時間半にわたり意見交換しました。

JICA-GIS（地理情報システム） 研修コース最終回（5年度目）が終了

（2004年8月16日～9月23日）
協力ネットワーク開発研究領域 北川勝弘

JICA-GIS研修コースの最終回（5年度目）が、去る9月下旬に終了しました。インターネットを通じて無料でダウンロードできるフリーGISソフトウェア「GRASS」を対象ソフトとして取り上げ、研修員が帰国後すぐに、自国でGIS技術普及の先頭に立ってもらえるように配慮されたこの研修コースは、JICAが開催している全国の数多くの研修コース中でも海外からの人気が高く、JICA内で“コスト・パフォーマンスの点で極めて優れている”研修コースのひとつとして評価されている、と言われます。

今回の研修員は、アルゼンチン、マケドニア、ミャンマー、

パプア・ニューギニア、パラグアイ、ウルグアイの6ヶ国から6名が参加。技術研修期間の4週間は、1週ごとにGISの基礎知識と各種コマンド操作方法、リモートセンシング、GPS（地球測位システム）などの室内実習が行われ、また毎週末にはGISを活用している機関へ出かけて現地見学・実習が行われました。今年度の技術研修講師として、名古屋大学、熊本大学、鳥取大学から4名を招いた他、現地見学会が、GIS会館（名古屋市）、岐阜県立森林文化アカデミー、兵庫県立人と自然の博物館、京都府立大学で行われました。



GIS研修風景